

高齢者の外出における”立ち寄り”の検討：ある地域に居住する高齢者への自由記述アンケートから

松本, 光太郎
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/3572>

出版情報：九州大学心理学研究. 5, pp.77-88, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



高齢者の外出における“立ち寄り”の検討

—ある地域に居住する高齢者への自由記述アンケートから—

松本光太郎 九州大学大学院人間環境学府

Re-evaluating the “stopping-by” episodes of the elderly people during their going out activities
—Qualitative analyses based on an open-end questionnaire study—

Kotaro Matsumoto (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The study is based on the assumption that elderly people decrease opportunities for going out, and tend to lose routines that they had before retirement. A number of disciplines focus on this phenomenon of going out. Yet these studies treat going out episodes as a variable or an aspect for explaining other features of the elderly people's lives. This research explores the nature of going out activities and focused on “stopping-by” episodes. The study revealed: (1) categorical differences in the type of place; (2) categorical differences in the type of action; and (3) categorizes of people encountered during going out activities. In the discussion it was argued that: (1) activities of stopping-by are contingent on the going out to particular stops; (2) there are different characteristics in place for stopping-by and going to stops; and (3) episodes of stopping-by can be found in the sequence of actions.

Keywords: Elderly people, Going out, Stop, Stopping-by, Action

私たちは日頃、家を出て、歩き、何かしらの交通機関を使い職場や学校(PTA活動など親の活動も含む)へ向かう。そして、その場所でいくらかの時間を過ごし、再び家へ帰っていく。多くの人たちは、このようなルーチンを日々当然のこととして行っている。

本論では、“高齢者”を上述したような“仕事に行かねばならない”、“家族のため～に行かねばならない”といった仕事や家事(主に子育て)の第一線から一歩退いた存在として捉えていく。その上で、高齢者にとっての外出の意味を捉えることが本研究の大きな目的である。

高齢者は、第一線から一歩退いたため、引退前までは当たり前とされてきた日々のルーチンを失いがちで、必然的に外出しなければならない機会が減少している。国土交通省(2002)が平成11年に行ったパーソントリップ調査¹⁾において、調査実施日に1日中外出をしない、つまり0トリップだった人は65歳以上で35.5%(全国平均)だった。他の年代では、年齢の若いほど0トリップを示す割合が低く、一番高い割合を示したのは50~64歳で13.3%だった。65歳以上においては、50~64歳の約2.7倍の割合で外出しなかった人がいたことになる。

これまで高齢者の生活を理解することを狙いとした調

¹⁾パーソントリップ調査とは、交通の主体である人の動きを調査することにより、主に人はどのような交通手段で動いたのかについて把握するものである。平成11年度調査は、10月と11月の平日、休日の各1日づつ、全国98都市で行われ、各都市に居住する50世帯が調査対象となっている。調査方法はアンケート調査であり、世帯構成員全員の1日の行動内容について記載することを求めている。

査・研究において、外出はしばしば取り上げられている。内閣府が高齢者を対象に平成10, 12, 14年に行った数千人規模の意識調査においても、外出(頻度、理由、交通手段、外出時の障害)に関するいずれかの項目を尋ねている。特に注目したいのは、2つの調査において(平成14年度高齢者の健康に関する意識調査;平成12年度高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査)、外出の理由を尋ねた結果である。両調査ともに買物、旅行、外食などは軒並み加齢とともに割合が下がり、医療機関への通院、デイサービスへの通所の割合は上がっている。一方で加齢とともに割合の変わらないのは、散歩だけであった。この結果は、高齢者の外出する頻度の減少が加齢に伴う活動性の減退、つまり高齢者の身体状況だけに原因を求めることが出来ないことを示している。むしろ、高齢者が外出をしている状況そのものを再考する必要があると考える。

つぎに、社会老年学において、竹嶋(1993)は高齢者に好ましい居住地域(都市と田園)を探る指標として外出を取り上げている。施設と居住者の概要、1日の外出、1年の外出を聞きとり調査によって理解し、活動性の生起が豊かである居住地域について検討している。

外出と間接的に関連する知見としては、高齢者における役割喪失や活動度の影響を吟味し、どのようないきがいを持てるのか探った社会参加研究(松岡, 1992)、就労時の余暇とは異なる余暇を高齢者がどのように過しているのか実態をつかもうとしている余暇活動研究(長谷川, 1988; 手島・冷水, 1991; 岡村, 1991)などが挙げられる。

余暇活動研究で注目されるのは、中尾(1992)が行った研究である。この研究は、“若者の街”としての印象が強い中心市街地に日常出てきている脱地域高齢者の実像を表すとともに、街で時間を過ごす上での環境側の問題点を指摘している。ここでは特に、市街地における高齢者の行動を観察し、さらには聞き取り調査を行っている。その結果、中心市街地での行動パターンを同伴者の有無、行動圏域、行為内容の3つの指標より分類している。そして、8つの行動パターン〔休憩所で時間の流れに身を任せる“ひなたぼっこ型”、休憩所などで周囲の街や人の流れを観察する“ストリート・ウォッチャー型”、自ら街の様子を見て歩く“タウン・ウォッチング型”、休憩所を渡り歩き人に話しかける“対人接触指向型”、常連が顔なじみになりグループ化した“都心サロン型”、情報・展示施設等を見て歩く“情報収集散策型”、展覧会や催しを鑑賞して回る“イベント巡回型”、友人と落ち合い長時間街に滞在する“談話・散策型”〕を見出している²⁾。

その他には、地理学において、仙田(1993)が高齢者の生活空間、特に社会関係を持ちうる空間的範囲を関係空間とし、距離によって5つに分類している〔近所：自宅から50m圏、狭域：1Km圏、中域a：5Km圏、中域b：15Km圏、広域：15Km圏以遠〕。また、いくつかの事例について、関係空間の発生と変化の検討を行っている。

環境行動学において、佐古・安藤・相馬(1993)は、高齢者の日常生活の実態が家の外においていかに広がっているのか理解することを目的とし、外出に不自由がないと考えた3施設に居住している高齢者の外出を調査した。ここでは、居住形態(養護老人ホーム、軽費老人ホーム、ケアハウス)、外出頻度、ADL(日常生活動作)、マルチプルストップ・トリップ³⁾の生じる頻度、マルチプルストップの数、そして環境認知の自己評価などを取り上げ、外出を成り立たせる要件を探っている。その結果、外出頻度の高い人ほど1回の外出でいくつかの場所を回る場合が多い(マルチプルストップ・トリップが多い)ことを示す一方で、外出の頻度が高い人ほど1回の外出でたくさんの場所を回るわけではない(ストップ数が多い)ことを明らかにしている。

また、南(1993)、南・園田・光安・苺田・中平(1997)は、大規模再開発による居住環境の変貌により引き起こされる高齢者の危機的な移行に関して、再開発がどのように体験され、意味を持つのか明らかにすることを課題とし、長期的な参加観察や個人面接を行った。その中で、

²⁾ 中尾(1992)は未公開であるが、上和田(1998)において研究の一部を紹介してある。

³⁾ 高橋(1991)によると、ストップとは、外出中に訪れる目的地を指し、トリップが1回の外出を指す。よって、1回の外出で複数の目的地を訪れることはマルチプルストップ、複数の目的地を持つ外出はマルチプルストップ・トリップとなる。

再開発によって、地域に住む高齢者はどのような影響を受けたのかを探る媒介要因として外出の実態を把握し、それがADLやコミュニティ意識、心身の健康状態とどのような関係にあるのか検討している。その結果、外出においては、活動性に違いがあり、1人での歩行による外出や社会的な外出が活発なタイプと、病院などの必要に迫られた外出のみに限られる無外出タイプへの分極化が生じることを示している。さらに、調査対象者の生活満足度の度合いは、外出頻度と正の相関関係にあることが示されている。

以上概観したように外出に関する調査・研究は、様々な分野に渡って行われてきている。これまでの知見を振り返って、高齢者において外出の減少が問題として捉えられること、そして、外出の減少が問題とされる理由として、外出が高齢者の日常生活における活動性や社会性を量る指標とされているためであることが分かった。しかしながら、これまでの研究は、高齢者の生活のある側面を理解するために外出を取り上げるのだが、外出という行為を主題化した研究はそれほど多くはない。

本論では、外出という行為を直接問う一つの経路として、外出の形態を考えてみたい。これまで行われてきた外出に関する様々な調査・研究は、目的地に関して尋ねることが多く、“目的地に行き帰る”という外出の形態が通常想定されてきた。その理解を一步進めた考えとして、経済地理学において、高橋(1991)が経路選択を理解するため、マルチプルストップという複数の目的地を訪れる外出行為に関して議論している。その中で、外出時に訪れた場所は複数の目的地として並列的に理解されている。複数の目的地という捉え方は、多くの外出が何かしらの目的地を前提とし、場所から場所へと渡り歩くことであろうことから考えると、外出の形態についての理解を促している。しかし、外出の形態に関して、経済地理学の背景にある経済性・合理性といった説明原理ではなく、行為者の経験という視点から考えた場合、それぞれの場所の意味を並列的に理解することは、我々の経験に近い理解といえるだろうか。ここでは、外出の形態を今一度検討するため、“目的地に行き帰る”という外出の形を一旦保留したい。そして、複数の目的地といった場所の並列的な理解を乗り越えるため、“立ち寄り”という形態を提案する。

目 的

本論では、ある地域に居住する高齢者に注目し、どこへ外出し、そこで何をしたのか、つまり外出全体の形態について理解することを目的とする。

さらに、本論は目的地と目的地以外に立ち寄った場所とは違うという仮説の上に立っている。2つの場所の違

いを理解することで、“立ち寄り”という形態の中身を深めていくことが本研究の狙いである。同時に、“立ち寄り”という視点から高齢者の外出全体の形態についても考えていく。

方 法

本研究ではアンケート調査を用いた。アンケートは調査対象者の外出の姿を出来るだけそのまま取り上げたいという狙いから、フェイスシートのみ選択肢を設け、それ以外の目的地と立ち寄った場所に関する質問項目は自由記述とした。

調査を行った時期 平成11年11月

調査協力者 福岡市東区Q町X丁目老人会111名にアンケートを郵送し、回答後郵送での返却を求めた⁴⁾。返却されたアンケートは66名分(回収率：59.5%)であった。うち1通については白紙回答、2通については施設入所しているためフェイスシートのみ記入であった。したがって、以上の3通を除いた63通を今回分析の対象とする。

アンケート内容 フェイスシートでは年齢、性別、現在の仕事、外出の頻度を尋ねた。質問項目は、最初に最近外出したこと、もしくは今思い出される外出の一つを尋ねた。そして、その外出において、目的地はどこであったのかをまず尋ね、その目的地に関連して、どのような目的地でそこに行ったのか、もしくはそこで何をしたのかを尋ねた。

つぎに、その目的地へ行く(帰る)途中、立ち寄った場所があればどこであったのかを尋ねた。立ち寄った場所について、そこで何をしたのか、誰か(誰)に会ったのか、その場所のいいところ悪いところの3点をさらに尋ねた。立ち寄った場所は、1つの目的地に対して2つ記述できるよう回答欄を設けた。

以上のように調査協力者が実際行った外出の目的地をまず尋ね、つぎに立ち寄った場所を尋ねるという質問を2回繰り返した。つまり、目的地は2ヶ所答えることができ、その行き帰りに立ち寄った場所を計4ヶ所答えられるように質問項目を用意した。そして、質問の最後に“最近家の外に出て面白かったり、興味を持ったこと”を尋ねた。

⁴⁾ Q町X丁目は、地場のデベロッパーが昭和40年代に開発した地域で、市中心部からは比較的近い場所に位置するベッドタウンである。この地区は、ほとんどが一戸建ての住宅で構成されている。建物の外観はそれぞれ異なり、整然とした道路構成のみがこの地区は開発されたものであることを物語っている。著者自身、Q町X-1丁目に居住しており、近隣の地理事情には精通しているつもりである。Q町X丁目老人会を知りえたきっかけは、著者の恩師(故人)の紹介によるものである。Q町X丁目老人会長に調査の主旨を説明し、了承されたためQ町X丁目老人会全員にアンケートを送付した。

結 果

調査協力者の属性 まず始めに、調査協力者の属性をTable 1に示す。

年齢は、65～88歳(平均74.8歳)であった。性別は、女性36名、男性26名と若干女性の方が多い。定職を持っているのは、自営業を手伝っている方以外は1人のみであった。その他と回答した人の大半は“主婦”と記していた。

結果の分析 本論では、立ち寄りという形態を理解するため、目的地と立ち寄った場所の違いを検討した。具体的には、目的地と立ち寄った場所に関連する以下の5項目に関して分析を行った。(a)最近、もしくは思い出される外出の目的地(以下、外出の目的地)、(b)そこに行った目的、あるいは何をしたのか?(以下、行った目的)、(c)目的地の行き帰りに立ち寄った場所(以下、立ち寄った場所)、(d)立ち寄って何をしたのか?(以下、立ち寄った理由)、(e)立ち寄った先で会った人。なお、質問において2度づつ尋ねた目的地と立ち寄った場所に関する回答は、質問項目ごとにまとめて分析した。

分析の手順は以下の行程で行った。まず、それぞれの回答ごとにカードへ書き抜き、そのカードを質問項目ごとに一面に広げ関連性のある回答ごとに分類した。この分類の作業は、以下に示した分類の補足説明と対になる作業であるため、それぞれのグループに入りきれない場合は分類を再検討した。後の考察においては、回答の文

Table 1
調査協力者の属性

年 齢	65-70歳	11名
	70-80歳	40名
	80-90歳	11名
	不明	1名
性 別	男性	26名
	女性	36名
	不明	1名
仕 事	定職についている (パートタイム含む)	1名
	自営業	4名
	地域活動等にたずさわっている	8名
	特にはない	36名
	その他	10名
	不明	4名
	外出の頻度	1日に2回以上
1日に1回		24名
1週間に3, 4回		18名
1週間に1, 2回		6名
不明		2名

脈、つまり調査協力者内の他の回答項目を含めて理解していくが、本分析においてはあくまでも質問項目ごとに回答の分類を行った。

1. 場所に関する分類項目 始めに、場所に注目して分類を行った。Table 2の“場所に関する分類表”において外出の目的地と立ち寄った場所を比較検討し、以下に複数名が記述した場所の補足説明を記した。

(a)“商業施設”は、商品を売買する場所である。銀行や郵便局も広義の商品(例えば、金融商品、切手)を売買する場所と考え、この分類に含めた。(b)“福祉医療施設”に入るのは、病院や高齢者向けの施設が主である。その他には、区役所内にある福祉センターも介護商品の

展示場ということでこの分類に含めた。(c)“文化施設”とは、有償・無償にかかわらず、サービスを提供する場所であるとした。例えば、美術館、体育館、多目的ホール、そしてパチンコ屋などである。また、項目の内訳において、文化施設と遊技場の区別は難しいが、さしあたって文化施設を生涯教育要素の強いもの、遊技場を遊び要素の強いものと考えたい。(d)“遠出”は、数日単位で家を離れなければならない場所への外出を指す。これらは、仙田(1993)における広域の関係空間に分類されると思われる。(e)“野外”とは、目的地がある場合、その目的地が公園であったり、川べりであったりと屋内ではなく野外である点が特徴的である。また、場合によっては目的

Table 2
場所に関する分類表

外出の目的地		行き帰りに立ち寄った場所	
分類項目	分類項目の内訳	分類項目	分類項目の内訳
(a) 商業施設	店・スーパー [15]	(a) 商業施設	店・スーパー [41]
	デパート [8]		デパート [13]
	郵便局 [2]		コンビニ [2]
	銀行 [2]		
(b) 福祉医療施設	病院関連 [23]	(b) 福祉医療施設	病院関連 [3]
	福祉施設 [3]		福祉施設 [1]
(c) 文化施設	文化施設 [25]	(c) 文化施設	遊技場 [2]
	遊技場 [5]		ホテル [1]
	ホテル [3]		
(d) 遠出	旅先 [14]	(d) 遠出	旅先 [17]
	実家 [1]		
(e) 野外	近隣 [9]	(e) 野外	公園 [6]
	山 [2]		近隣の人 [2]
	遠方の公園 [1]		
(f) 信仰関係 [7]	お寺	(f) 信仰関係 [3]	教会
	教会		
	地藏		
(g) 料理屋 [1]		(g) 料理屋 [10]	
会社 [2]		滞留所	停留所 [7]
近所の集会所 [2]			駐車場 [1]
地名	近隣 [11]	家 [5]	デパート周辺 [1]
	中心市街地 [8]		
外出しない [4]		元の職場 [2]	
		地名	中心市街地 [2]
			近隣 [0]
		立ち寄らない [34]	

回答総数147

回答総数155

複数回答の場合、延べ換算で行った。[]内は回答数である。

地を特定せず、ただ外を散策する場合もある。(f)“信仰関係”とは、何らかの信仰に関連する場所である。(g)“料理屋”は、回答欄にはっきりと店の名前、もしくは食事に行く旨が書いてある場合に分類した。

“地名”は、回答欄に地名のみが書いてある場合に分類した。地名に関して、行った目的や立ち寄った理由を参照して、より具体的にどこへ行ったのか理解できる場合もあったが、解釈の基準が不明瞭になる場合もあり、結果においては回答欄に記してあることのみで分類した。その他に、両質問項目に共通ではない分類項目があった。“滞留所”とは、交通機関の結節点や待ち合わせをするポイント、そして、何かと何かを結ぶためにしばらく時間を過すポイントを分類した。“家”とは、他者の家の場合もあるが、自分の家の場合もあった。

2. 行為に関する分類項目 つぎに、外出先での行為に注目して分類を行った。Table 3の“行為に関する分類表”において、どのような目的で行ったのか、もしくはそこで何をしたのかを尋ねた“行った目的”と立ち寄り

た場所で何をしたのかを尋ねた“立ち寄った理由”を比較検討し、以下に複数名が記述した外出先での行為の補足説明を記した。

(a)“買物”は、買物という記述や買うことを事前に考えていた商品の具体的な名前が書いてある回答を分類した。(b)“観て周る”とは、参加が予定されている場所へ赴き、展示物や催しを鑑賞することである。具体的には、旅行において観光地を観光したり、催しへ参加したりすることである。(c)“所用”を行う場所は機能的であり、場所と行為が一対一対応しているように思われた。例えば、病院は治療をする場所であり、美容院はパーマをかける場所である。このように、所用とは、ある目的行為を行う場所として分類した。(d)“野外を散策”においては、健康を目的とする人が多いが、俳句を捻るために外に出る人やゴミ拾いのために外に出る人もいた。その他に、目的地を定めて散歩する人がいる一方、目的地を特定せず、ただ外を散歩する人もいた。(e)“集まり”は、何か行うことと集まること、記述上は切り分けられな

Table 3
行為に関する分類表

目的地での行為		立ち寄り先での行為	
分類項目	分類項目の内訳	分類項目	分類項目の内訳
(a) 買物	買物 [27]	(a) 買物	買物 [44]
(b) 観て周る	催しへの参加 [13]	(b) 観て周る	観て周る [13]
	旅行 [7]		
(c) 所用	治療等 [17]	(c) 所用	所用 [9]
	所用 [3]		治療等 [4]
	郵便物送付 [2]		競艇 [1]
	本を借りに [1]		
	パーマをかける [1]		
(d) 野外を散策	近隣を散歩 [6]	(d) 野外を散策	散歩 [3]
	遠出による散策 [3]		環境に向き合う [2]
(e) 集まり	稽古事 [10]	(e) 集まり	おしゃべり・話し合い [10]
	定期的サークル活動 [9]		定期的サークル活動 [1]
	同窓会・OB会 [3]		お見舞い [1]
	スポーツ [3]		
	お見舞い [1]		
	親戚 [1]		
(f) 信仰 [6]		(f) 信仰 [2]	
(g) 食事 [2]		(g) 食事 [13]	
なし [3]		滞留・待ち合わせ [6]	
		なし [17]	

回答総数118

回答総数126

複数回答の場合、延べ換算で行った。〔 〕内は回答数である。

いものを分類した。例えば、OB会のゴルフコンペは、集まるのが先か、ゴルフをするのが先か、参加をする動機が切り分けられないと考えた。(f)“信仰”を行う場所は、神に祈る場所であると機能的に捉えると、定義上所用と重なる。しかし、場所の意味がより多義的であると考え別カテゴリーとした。(g)“食事”は、喫茶店や飲酒など飲食に関わる内容が記してあった場合に分類した。

最後に、両質問項目に共通でない分類項目として、“滞留・待ち合わせ”は、ある場所で一旦留まる状況として分類した。例えば、三越ライオン前での待ち合わせ、バス停留所での乗り継ぎ、コンビニでのトイレ借用などがここに分けられた。

3. 立ち寄った先で会った人の分類及び配置 まず確認することは、立ち寄った先で会った人がいないという回答が約半数(52名)を占めることである。立ち寄った先で会った人を記した人は53名であった。なお、空欄はカウントしていない。この結果に関して、会った人として

記述する範囲が調査協力者によって異なるため、外出時の実際の行為を観察する必要があるだろう。しかし、いずれにしても立ち寄った先で対人的接触がないとするならば、なぜそこに行くのだろうか。少なくとも対人的接触だけが立ち寄る理由ではないと思われる。

つぎに、立ち寄った先で会った人を分類し、それぞれのグループの配置を検討した結果を Fig.1 に示した。偶然会う一会うことを予定している、知人—知らない人という2軸を設定した。この2軸上に配置すると、例えば、店員に会ったとして、その関係は皆一様ではなく、大きく分けてその店員に会うことを予め想定している場合と、たまたま出会い今後の付き合いも不確定な場合の2通りあることが分かる。また、出会った友人・知人においても、会うことを約束していたよく会う人、よく知っているが久しぶりにたまたま会った人、よく会うが知らない人などいくつかのグループに分類することが可能であった。

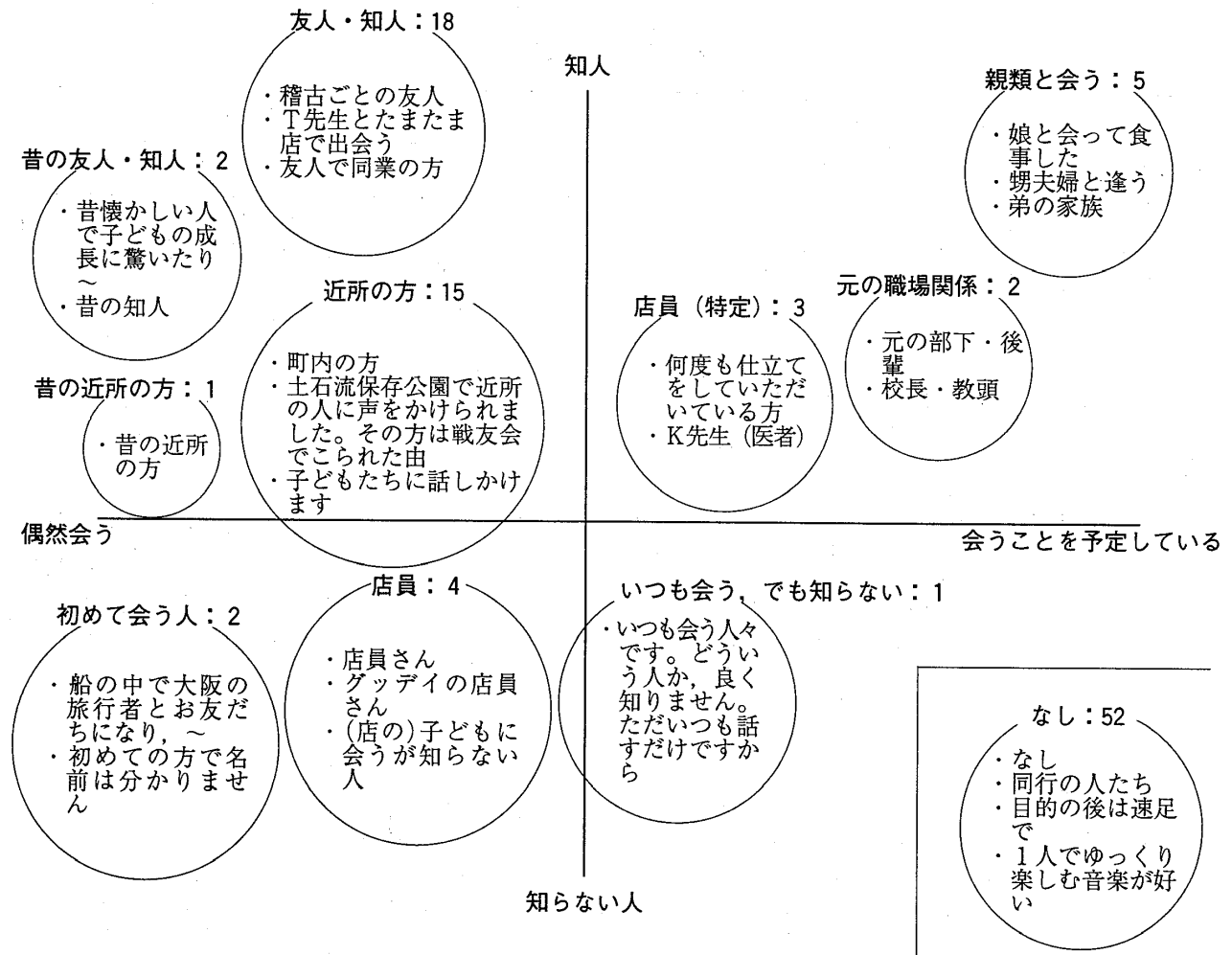


Fig.1 立ち寄った先で会った人

4. 結果のまとめ まずは、外出の目的地と立ち寄った場所を比較すると、以下の違いが読み取れた。目的地に比べ、立ち寄った場所として記されることが多かったのは“店・スーパー。特に個人店”、“料理屋”、少なかったのは“病院関連・文化施設”、立ち寄った場所だけみられたのは“滞留所”、“家”であった。

つぎに、行った目的と立ち寄った理由を比較すると、以下の違いが読み取れた。行った目的に比べ、立ち寄った理由として記されることが多かったのは“買物”、“食事”、少なかったのは“治療等”、“定期的サークル活動や稽古事”、立ち寄った理由だけにみられたのは“おしゃべり・話し合い”、“滞留・待ち合わせ”といった行為であった。

考 察

ここでは主に、結果において示された場所と行為に関する分類に加えて、具体的な記述を例示しながら考察する。なお、本研究は、目的地と立ち寄った場所との違いを探求することにより立ち寄りの中身に関する理解を深めようと考えている。そこで本考察では、まず結果の分類から導かれる目的地と立ち寄った場所の違いを明らかにする。

1. 目的地と立ち寄った場所との違い まずは、結果で述べた場所の違いと行為の違いを基にして目的地と立ち寄った場所の関係を考察していく。

南他(1997)、内閣府(2001, 2003)の結果から、全体では店、スーパー、そしてデパートが外出先として多く挙げられ、外出先と対応した行為、つまり買物のもつ比重の高さが示唆されている。ついで通院を外出先として挙げる人が多く、治療を目的とする人も多かった。南他(1997)、内閣府(2001, 2003)において導き出された結果は、外出先としては本調査の結果と大方一致している。しかし、本調査における目的地と立ち寄った場所の比較を見てみると、店・スーパーは目的地として挙げられる一方で、より多くの人々が立ち寄った場所として挙げていた。また、病院関連は、目的地に比べ、立ち寄った場所として挙げる人が顕著に少ない。行為としても、立ち寄った先では買物が多く、目的地では治療等の多いことが明らかとなった。

つぎに、文化施設について、南他(1997)の結果においては、外出先として公民館、文化施設、老人大学に分類され、比較的多くの人々がこの項目を挙げていた。行為としては習い事、美術鑑賞という回答が多くみられていた。本結果をみてみると、目的地として文化施設を挙げる人は多いが、立ち寄った場所として挙げた人はみられなかった。それに附随して、目的地での行為として多く挙げられていた稽古事、定期的サークル活動、そしてスポーツ

が立ち寄った先での行為として挙げられていることは少ない。

さらに、目的地として挙げられることの少なかった料理屋が、立ち寄った先としては多くの人々が挙げていた。また、行為としても立ち寄った先で食事をしたという回答が多かった。

以上の場所と行為の比較から、外出先として目的地と立ち寄った場所を区分できることが示唆された。また、病院関連における治療行為、文化施設における稽古事、定期的サークル活動、そしてスポーツなど定期的に通わなければならない場所が目的地として挙げられていることを確認できた。この“定期的に通わなければならない場所”が引退前のルーチンを引き継いでいる可能性は指摘できるだろう。

2. 目的地と立ち寄った場所の関係 上記の考察で示唆された目的地と立ち寄った場所の違いについて検討を行うため、ここでは、立ち寄った場所として挙げられることの多かった料理屋と家に注目する。そして、目的地と立ち寄った場所がどのような関係にあるのかについて具体的な記述を例示しながら考察していく。

まずは、目的地としてどこへ行った前後に料理屋へ立ち寄ったのかを検討したい。Table 4からは、Aさんは稽古事、Bさんは講演会、Cさんはゴルフといった目的地へ向かう前後に料理屋で食事をしたことが読み取れる。また、その他に“外食をかねて美術館へ”という記述があり、料理屋へ寄ること、もしくは外食することは、目的地へ行くことに付随する行為であるといえるのではないだろうか。

つぎに、家に立ち寄ることについてである。Table 4から家に寄って行く、さらには、自分の家さえも立ち寄りの対象になっていることが読み取れる。Dさんは、老人福祉センターに行くのをかねて実子の家へ立ち寄っている。Eさんは、所用のついでにスーパーで買物をし、知人宅へ寄っている。そして、最後にFさんであるが、自宅に立ち寄っている。上記のDさんとEさんは立ち寄り行為として了解できるが、Fさんの自宅に立ち寄るといふ行為にはどのような意味が含まれているのだろうか。

まず、自宅に立ち寄るといふ記述は、Fさん1人の帰宅においてはありえない。Fさんの自宅に立ち寄るとは、一緒に家に向かう友人にとって可能な行為である。そしてもう1つの条件が、自宅以外の場所においてはじめて自宅が立ち寄りの対象になるということである。自宅において自宅に立ち寄ることは考えられない。つまり、外に出て人に会い、その外出先において出会った友人とともに自宅を眺めた状況において始めて、自宅が立ち寄りの対象として意味を帯びてくる。これはFさんにとって自宅が立ち寄りの対象になるということではなく、Fさんと

Table 4
立ち寄りに関する具体的な記述

料理屋へ立ち寄った記述

調査協力者	立ち寄った場所	立ち寄った理由(行為)	会った人	立ち寄った場所のいいところ・悪いところ	どこへ行く(帰る)途中?
Aさん	天神方面	買物, 昼食	友人(コーラス)	地下街, デパートは疲れる(休めるコーナー少ない)	趣味でやっているコーラスのレッスンからの帰り
Bさん	博多駅地下食堂	夕食	[空欄]	特にない	健康講演会に出席, 駅地下商店街へも買物をするために立ち寄る
Cさん	帰る途中食堂に寄りました	食事をしました	5,6人で行きましたが, 別の人は会いませんでした	店員さんが若い人でしたが, 大変感じがよく気に入りました	OBのゴルフコンペでゴルフをしました

家に立ち寄った記述

Dさん	子ども夫婦の家	世間話や近況問い合わせ	別がないが, 途中で近所の人に	屋内のかたづけ不足など気になる	老人福祉センター
Eさん	知人宅	おしゃべり	[空欄]	独り暮らしなので気を使う人がいない	所用で不動産会社により, スーパーで買物をする途中
Fさん	自宅	昼食をした	お茶の友人2人	[空欄]	お茶会へ招待された帰り

個人店に立ち寄った記述

Gさん	新天町R	洋服選び	近所の奥さん	わりに老人むきの服が多く, 相談によくのつてくれるし, 50%引きの服もあるから	茶道教室の帰り
Hさん	須崎町D	洋服の仕立てを注文していましたので仮縫いしました	何時も仕立てをしていただく方に会いました	場所的には少し不便ですが, 仕方ないと思っています。歩くことが体によいので, よいと思います。	展集会の帰り
Iさん	地元M	お菓子等買う	誰にも会わない	店内に椅子が用意してあり, お茶を出して下さるので疲れた時生き返る思いがする。	スーパーでの買い物の帰り

滞留所に立ち寄った記述

Jさん	天神	バス乗り換え	なし	楽しかった(目的地に関する記述だと思われる)	大濠公園能楽堂
Kさん	三越ライオンの銅像前	待ち合い場所	女学校の友達	分かりやすい場所だから	市内天神
Lさん	コンビニ	トイレ, 休憩	[空欄]	駐車場が広い, 店内にトイレがある	筑豊(ゴルフ)

友人を含めた“我々”(Schutz, 1932)にとって家が立ち寄りの対象になると考える。よって、料理屋と同様に、立ち寄りとは自宅以外の場所へ行くことが必要条件であり、目的地に付属する行為であるといえる。

3. 場所としての立ち寄り 上記において、目的地と立ち寄った場所の関係について議論してきた。ここでは、立ち寄りそのものを理解するために、立ち寄った場所に関する分類の中から、店・スーパーを挙げる中で特に個人店を挙げる人が多かったこと、そして、滞留所という場所について具体的記述を例示しながら考察していく。

まずは結果において、立ち寄った場所として店・スーパーを挙げた人の中で、特に個人店を挙げる人が多かったことについて取り上げる。個人店とは、店舗形態がスーパーのように複合ではなく、店主を中心に少人数で経営している店である。

Table 4 の G さんは、稽古事帰りに洋服を選ぶために、新天町 R に立ち寄っている。H さんは展覧会へ行った帰りに、洋服を仕立ててもらうために不便ながらも須崎町 D 洋品店に立ち寄っている。I さんは、地元のスーパーに買物へ行った帰りに、お菓子等買うために M 茶園へ寄っている。この3つの個人店に共通しているのは、いずれの人も店、もしくは店員の対応を熟知しているといえる点である。また、これらの記述を考慮するとそれぞれの店へ定期的に訪れているであろうことが読み取れる。

ところで、立ち寄った先で会った人に関する回答で、H さん以外は店員を挙げるのがなかった。しかし、I さんと G さんが出会った店員を、Fig.1 の軸上で表すならば、H さんと同様、右上に位置している特定の店員というグループに入るのではなかろうか。H さんは、もう1ヶ所回答された目的地(郵便局)へ行った後、地元の個人商店に立ち寄った理由を“個人のお店なので、お話をして、帰りました”と記述している。結果で示したように、立ち寄った先での行為として、おしゃべり・話し合いは複数の人が回答した。そのことから、個人店には商品があるだけでなく、相談やおしゃべりに付き合ってくれる店員の存在があるために立ち寄った先として多く挙げられていると考える。

つぎは、立ち寄った場所としての滞留所、そして、ここでの滞留・待ち合わせという行為について取り上げる。Table 4 の J さんは、能を観に行った帰りにバスを乗り換えるため、中心市街地のバス停でしばらく時間を過していると推測する。K さんは、友人との待ち合わせのために三越のシンボルであるライオンの銅像前で待っている。L さんは、ゴルフ場へ行く(帰る)途中、トイレを借りたり、休憩するために車でコンビニに立ち寄っている。3つのエピソードで共通することは、個人店に比べ、人と交流する目的が薄いという点であろう。そこは、前の

行動から次の行動へと移行する結節点である。滞留所は、人と積極的に行為をする場所ではないが、滞留できる場所、しばらく居てもとがめられない場所として、前いた場所とこれから向かう場所の間にある第3の場所として意味を持っていると捉えられる。

以上から、立ち寄った場所は目的地とは異質な意味を持つ場所であることが確認できた。具体的には、立ち寄った場所は治療する、運動するといった行為を明示しにくい。むしろ、立ち寄った場所は、しばらくそこにいることそのものに意味があるのではないかと考える。

ところで、これまで立ち寄った場所を、目的地との関係によって議論してきた。目的地の存在しない外出とはないのであるか。次は、この点に関して議論する。

4. 行為としての立ち寄り これまでの議論においては、目的地の存在を前提として、立ち寄りを目的地との関係において捉えてきた。ここでは、目的地を持たない外出について議論をしていきたい。まずは、野外という場所、そして野外を散策する行為について検討を行う。

ところで、本論の冒頭において述べたように、内閣府(2001, 2003)が行った調査で、買物、旅行、外食などの割合は軒並み年齢とともに下がっていく一方、医療機関への通院、デイサービスへの通所は上がっている。その中で割合の変わらなかったのは、散歩だけであった。この傾向はなにが原因で生じたのだろうか。

散歩、もしくは散策という行為を挙げている場合、特徴として Table 5 で示したような目的地がはっきりしない記述があった。立ち寄りとは、目的地へ行くことに付属する行為であると上述したのだが、野外を散策することにおいては、目的地がはっきりしない、もしくは目的地を設定しない外出のあることが認められる。M さんにおいては、一時休憩のため、公園に立ち寄ることはあるが、そこが目的地ではなく、むしろ外出し体を動かすことを目的としている様子が伺える。N さんも同様に、河川敷に立ち寄ることを記しているが、外出の目的は病後の体力回復のための運動とされている。また、O さんにおいては、ジョギングの目的地として“香椎花園迄”と書かれている。しかし、後の記述において“外出は日によって足の向くまま走り、帰りはバスで帰ってきている”と記している。さらに、そのジョギング中の行為として、“町、並木の風景の移り変わり、川辺の釣人の様子等を見ながらのジョギングです”と記してあり、どこかに立ち寄るわけではないが、様々な経験をしている様子が記されている。

上記の事例から、目的地のない外出が存在するといえるのではないか。言い換えれば、どこかへ行くという場所に重きがおかれる外出ではなく、散歩、ジョギングもしくは散歩といった行為に重きがおかれる外出があると考える。

Table 5
散策に関する具体的な記述

調査協力者	目的地	行った目的	立ち寄った場所	立ち寄った理由(行為)	会った人	立ち寄った場所のいいところ・悪いところ
Mさん	毎朝(晴天時)約1時間, 正味40分自宅近く徒歩	体力増強(特に足腰を鍛える為), なにもしない	一時休憩(公園)	なし	なし	川畔の清涼空気と途中の昇り降り坂道にあこがれて
Nさん	午前・午後家の近郊30~1時間, 目的地は特定せず	病後の為の運動を目的とした散策	多々良川, 河川敷	静かに腰をおろし, 昭和40年頃を思い浮かべながら現在の東区発展の状況に驚いています。	〔空欄〕	河川敷が立派に整備され, 運動に, 又, 静かに心のやすらぎを求めるのに最適だと思います。
Oさん	香椎花園迄	ジョギング散策	帰りはバスにて帰宅	〔空欄〕	〔空欄〕	〔最近家の外で興味を持ったことから転記〕最近, 妻と2人で最低1時間以上, ジョギングを行っています(午後)。行き先は定まらず, 東, 西, 南, 北, その日によって, 足の向くまま行っています。町, 並木の風景の移り変わり, 川辺の釣人の様子等を見ながらのジョギングです。

5. 補論 立ち寄りを含むうる範囲とは これまでの議論では, 場所から行為へと立ち寄りを含むうる範囲の拡大を試みた。ここでは, 立ち寄りという言葉がどの範囲までを含むのか検討したい。

立ち寄った理由を尋ねたなかで, “立ち寄りません。車での送迎中, 各家庭に植えられている花を眺めるのが大好きです”(Pさん)という回答があった。この回答は, 立ち寄らないと記述しているので, “なし”というカテゴリーに分類した。しかし, この記述は立ち寄っていないと分類すべきであろうか。

Pさんはデイサービスの送迎中, 同乗者が自宅前で乗降車するため, 車が停車する度, そこの家の花を眺めている。しかも“大好き”と記すぐらい楽しみにしている。このことは, Pさんが花と会うことを予定し, 定期的に出会っていることを示している。仮に, Fig.1にこの関係性を配置するならば, 個人店と同様右上に配置することが可能であろう。つまり, 出会うことを予定し, 習慣的に出会っていることが立ち寄りの条件とするならば, 車が停車する度に眺めている行為も立ち寄りに含まれるといえるだろう。

しかし, Pさんのケースにおいては, Pさんが立ち寄った場所を明示することが出来ない。なぜなら, 送迎バスという主体的に立ち寄った場所を選択できる状況にないために, 通りがかりとしかいえない状況だからである。Table 5に示された行為としての立ち寄りでは, 場所だけでなく, 様々なかかわりの生まれる進行中の行為を立

ち寄りとして積極的に取り込んでいった。Table 5とPさんのケースとの違いは, Table 5のケースは調査協力者が自分の足で立ち, 行く方向を選択し, 場所として明示されなくても能動的に寄っていき何かしらの経験をしていることである。つまり, Pさんのケースが立ち寄りという言葉の範囲に入りうるかどうかは主体性, 能動性の問題にかかってくる。ここで, Pさんのケースを立ち寄りでないとして早急に結論づけることは避けたい。なぜなら上述した主体性, 能動性という態度は今一度議論の必要があると考える。このことは, 今後の課題として持ち越したい。

ところで, 上述のPさんが利用しているデイサービスは, 高齢者がある場所に運び, そこで人と語らい触れ合う場を提供することによって, 本人の精神的健康の安定, 家族の負担軽減が目的の一つとされている。この支援において, 自宅と施設という閉じた空間に関して議論されることはあっても, その外側, 特に移動中の意味が主題になることはあまりないように思われる。しかし, Pさんの記述のように, 送迎バスという主体的に立ち寄る場所を選択できる状況にない, 通りがかりとしかいえない状況においても, 強い関係性ではないが, 淡いかかわりといえるものは生まれている。立ち寄りという言葉から漏れ出る可能性はあるが, 移動中のPさんが花と日々出会っていることは, Pさんの生活の中でとても意味のある経験ではないかと考える。

知見のまとめ

本論では、ある地域に居住する高齢者の外出全体の形態について理解することを目指した。その中で、従来の知見における複数の目的地を並列的にまわるという外出形態だけに留まらず、立ち寄りという目的地へ行くのとは異なる行為形態の存在に着目してきた。そして、目的地と立ち寄った場所との違いを探索することにより、立ち寄りの理解を深め、同時に立ち寄りという視点から外出全体の形態についても考察し、以下の結論が導き出された。

(1) 多くの立ち寄りとして記述されている行為は、ある場所(いわゆる目的地)へ行くことに付随する行為である。また、目的地が引退前のルーチンを引き継いでいるとするならば、目的地に付随する行為である立ち寄りもルーチンの一部といえるだろう。

(2) 立ち寄った場所には、目的地とは異なる特徴がある。立ち寄った場所は、目的地に比べ具体的な行為を明示しにくい、むしろ、そのことが特徴となっている。例えば、他の店舗形態に比べ個人店に立ち寄る理由として、そこに居させてくれる人の存在があり、滞留所に立ち寄る理由として、居れることを許容する場所の特徴がある。

(3) 立ち寄りは、立ち寄る場所としてのみ現れるのではなく、進行中の行為そのものにおいても現れると考えられる。1つの代表例が、目的地を前提としない散歩中の行為である。なお、立ち寄りが含みうる範囲を線引きする上で、行為者の主体性や能動性の問題を今後の課題として持ち越した。

行為としての立ち寄りが明示化されることはあまりない。それは、外出においてどこへ行き、そこで何をして、誰に会ったのが、つまり、家の外に点在する点(目的地)についてのみ問われることが多かったためではなかろうか。しかし、本研究において示唆されたように、高齢者における日々の外出の形態は、必ずしも目的地だけで形成されているわけではない。外出の形態は、点と点だけでなく、立ち寄りを含めた行為の連続として、言い換えると、線として成り立っている。しかし、これまで暗黙に了解されていた目的地中心の外出理解の結果、一線から退いた高齢者の日常生活において行き場所となるところが少ないため、昨今様々な高齢者専用の居場所があちこちにつくられている。

本論の冒頭において、高齢者の生活の特徴を“一線を退く過程でルーチンを失いがちになり、外出する機会が減ってしまう”と定義した。さらに本論を経た結果、以下のことが言えるだろう。外出する機会の減少は、一線を退くことによる目的地の減少と関連があるだろう。しかし、目的地の減少が日々のルーチンの喪失に直結はし

ない。なぜなら、一線を退いた後における外出の形態は、点と点だけでなく、立ち寄りを含めた行為の連続として成り立っているからである。散歩をする人の割合が加齢とともに減らないことは、日々のルーチンを形成しているものが目的地だけではないことを如実に示している。高齢者の生活の特徴は、目的地の減少との関連から捉えることができる一方で、点と点の間を理解することから異なる見解を導き出せると考えている。今後は、点と点の間に連なっている外出時の行為に注目し、高齢者の外出について、より精緻化した理解を目指したい。

引用文献

- 長谷川倫子 1988 定年前後における中高年の余暇活動の変化—東京都内の60歳代前半層男子の場合— 社会老年学, 28, 33-44.
- 上和田茂 1998 実像を生きる老人たち—建築学者がとらえる都市老人の生態— 山内隆久(編) 人間関係事例ノート ナカニシヤ出版 Pp.4-23.
- 国土交通省 2002 平成11年全国都市パーソントリップ調査 都市における人の動き—分析結果からみた都市交通の特性
- 松岡英子 1992 高齢者の社会参加とその関連要因 老年社会科学, 14, 15-23.
- 南博文 1993 都市再開発に伴う高齢期居住者の生活世界の再体制化と心理社会的適応 平成3・4年度科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究A, 代表: 山本多喜司) 高齢者居住環境に関する環境心理学的研究 Pp.113-151.
- 南博文・園田美保・光安輝高・苅田知則・中平大輔 1997 地域に住む高齢者をサポートする“まち環境”の構造. 平成6~8年度科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究A, 代表: 相馬一郎) 高齢者の環境移行と快適環境の形成に関する研究 Pp.25-72.
- 内閣府 1999 平成10年度高齢者の日常生活に関する意識調査
- 内閣府 2001 平成12年度高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査
- 内閣府 2003 平成14年度高齢者の健康に関する意識調査
- 内閣府 2003 平成14年度1人暮らし高齢者に関する意識調査
- 中尾宣之 1992 高齢化社会に対応した余暇活動施設の再編成に関する研究—都市高齢者の余暇活動の多層化について— 平成3年度九州産業大学修士論文(未公刊)
- 岡村清子 1991 団地居住老人の余暇活動. 社会老年学, 33, 3-14.

- 佐古順彦・安藤孝敏・相馬一郎 1993 高齢者の外出行動に関する研究 平成3・4年度科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究A,代表:山本多喜司) 高齢者居住環境に関する環境心理学的研究 Pp.91-112.
- 仙田裕子 1993 高齢者の生活空間—社会関係からの視点— 地理学評論, 66A(7), 383-400.
- Schutz,A. 佐藤嘉一(訳) 1982 社会的世界の意味構成 木鐸社
- (Schutz,A. 1932 *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt.* Wien: Springer.)
- 高橋重雄 1991 目的地選択研究におけるマルチプル・ストップの重要性 地理学評論, 64A(6), 388-407.
- 竹嶋祥夫 1993 立地条件の違いによる高齢者の外出行動に関する研究—有料老人ホーム居住者を事例として— 老年社会科学, 15(1), 15-29.
- 手島陸久・冷水豊 1991 高齢者の余暇活動の測定に関する研究 社会老年学, 35, 19-31.